

目的 本論文は日本独自の民族衣装であるきものと襟に着目し、江戸時代から現代に至るまでの色彩の時系列的変化について数量的に表わそうとした試みである。

さらに、現代におけるきものの色に対する感情調査もあわせて行った。

方法 資料として、江戸時代は浮世絵（肉筆・版画）、明治・大正・昭和（前）は各時代を代表する日本画家の絵画、昭和30年代からは雑誌『美しいキモノ』という間接的な資料をもとに、色彩色差計CR-200(MINOLTA)により、きものの最も面積の大きい地の色を測定した。これをマンセル記号で表わし、ISCC-NBSにより、色相・トーン別に分類し、出現率を求めた。また、カラーシミュレータにより、きもの・半襟・伊達襟の色の組み合わせによる感情変化を学生を対象としてSD法による調査をした。

結果 ①きものの色彩は江戸以後変動はあるものの青・茶・鼠が中心で、時代の経過と共にピンク・黄等の明るい色がみられる。襟は大正まで色付きが多く、昭和から白が多くなる。
 ②現代のきものの色彩の特徴 I、明度・彩度が低く、grayishトーンが増大している。
 II、基調となる色彩の外に裾模様として、色相、明度・彩度対比の配色が見られる。
 III、色半襟・伊達襟が増加している。
 ③きものと襟の色彩に関する感情調査によれば、きものと白い半襟との配色は評価性が高く、活動性が低い。淡色系のきものは色半襟よる影響を受けやすく、寒色・暖色それぞれの特徴が顕著に表われる。色半襟により活動性が増すものの、評価性が低くなる。TPOにあわせた装いが大切であろう。